

1998年

望月洋史 個展

日辰画廊

望月洋史個展

瀬木慎一（美術評論家）

特定といっても多様である対象に向かい、その動きに対応して動く画像を創出するという企図は、容易ではない。

それは、写実の観念に基づくリアリズムの枠を超えるものであり、そうかと言って、自由自在にどうしても描けるものでもない。

「照応」correspondenceという言葉があり、それに近い作画法になるのかもしれないが、ぴたりとした既存の言葉は見つからない。

対象と鏡あるいはレンズという関係ならば、昔からあるが、この面家の心は、かならずしもそういったものではない。

私の見るところでは、両者は同等であり、たとえ前後関係はあるにしても、視覚が画像を触発するのは、瞬間的で同時的である。それを記述する手の動作までが、即時的とは言えないが、まさしく「間髪を入れず」であり、髪すらも入らないこの「間」に、それにもかかわらず、視覚言語が発生するのは、驚異である。譬えれば、火花や電光に近い言わば表情の言語であり、「メタ言語」と呼ぶしかないものだろう。

言語としては、確かに「メタ」（以前）であるが、それが「絵画」以後を指している画家から闊達に内発していることに、私は眼を見張る。

